

2023 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。一部表記を改めた所があります。

二〇〇九年五月、連休明けの日本を新型インフルエンザが襲った。ウイルスに感染した患者への心ない偏見と共に、マスク騒動^{そうどう}が起きた。どこの店に行ってもマスクは売り切れ、通勤通学では人々のマスク姿があふれ、本場に必要ない医療現場でマスクが足りなくなる事態が生じた。科学的にマスクがインフルエンザウイルスへの感染防御に役立つなどということは証明されていない。感染症を専門にする医師の間では常識だ。それだけに世界的にも奇異の目で見られた。日本人のマスク重視はどこからきたのだろうか。

新型インフルエンザ対策をシヨカンする厚生労働省のトップ、舛添厚生労働大臣(当時)は、予防対策として国民に対し、ことあるごとに「うがい、手洗いそしてマスクの着用」の三点セットを繰り返し訴えた。

メディアもまた、当初この三点セットをステレオタイプに繰り返した。患者を隔離した病院前からマスクをして中継する記者、マスクをしたうえゴーグルをかけて学校関係者の会見に臨む記者など、メディアは必要以上の「恐怖」を煽ったという批判が起きた。その一方で、次の調査結果はマスク騒動の裏に潜む日本人の心性というものを透かして見せる。「人と防災未来センター」と「東京大学総合防災センター」が、神戸市に住む二五〇人に対して共同で行ったアンケート調査だ。

「あなたは、マスクをつけることを、どのように感じますか」(複数回答) という問いに対して、次のような回答が寄せられた。

- ・マスクをしても、自分への感染を防ぐ効果は低いと思う。 四二%
- ・マスクをしても、他人への感染を防ぐ効果は低いと思う。 二五%
- ・マスクをみんなつけるべきだと思う。 五〇%
- ・息苦しくてつけるのは難しい。 五三%
- ・見た目が悪くなるので、人前ではつけたくないと思う。 一一%
- ・マスクをしないとイケないような周囲の雰囲気を感じる。 六五%

注目したいのは「マスクをしないとイケないような周囲の雰囲気を感じる」と答えた人が六五%に達していることである。きよろきよろと周囲を見回して空気を感じ取り、周囲に合わせる。恐ろしいのはおうおうにしてそうせざるを得ない心理に追い込まれてしまうことである。

阿部謹也は、私たちが営む共同体には伝統的な行動原理としての「世間の掟」が生きていて、

明治以来導入された近代合理主義の精神・法律とは別のルールで私たちの行動を律していると述べている。

日本ではある方向性が見出されたとき、その方向に激流のごとく流れ、歯止めが利かなくなる。イラク人質事件の自己責任バッシングや二〇一三年、オリンピックを再び東京に誘致する際の驚くほどの一枚岩はまさにそれだった。そして一時がたつと跡形もなく忘却が広がる。まるで、そんな騒ぎがなかったかのように、つぎの話題に移るのである。

日本で空気が醸成されやすい背景には聖徳太子以来培われてきた「和の精神」も関係している。日本の社会では徹底したケンカを好まず、どこかで和解することが仕組まれてきた。

明治以前の社会構造は、ムラと言われるような共同体的な小集団で成り立っていた。特に中世では「惣」と呼ばれる村落の結合組織があり、かなり自治的だった。大人（乙名）たちが惣の政治を寄合によって決め、重要な事項を決める際には一味神水という神前に供えた水を一同で飲んで団結を図ることもあったという。各地で起きた徳政一揆は、惣を基盤に各地の農民が連絡を取って蜂起したものだ。のちに豊臣秀吉が刀狩りで全国の惣から武器を取り上げ、惣は解体させられていくが、日本人の意識にはこの惣が沈んでいると司馬遼太郎は言う。

徳川時代には、なるべく当該の地域社会の顔役（庄屋・名主・組頭など）や、本家の家長等のチュウサイによって「内々ニテ相済」まさせるという方法で解決する施策がとられ、もし、庄屋・組頭等による調停を経ないで訴訟に及んだ場合には、訴え出た本人のみならず、庄屋・組頭まで処罰されたのだという。

共同体的な中間集団の秩序維持のためにも重要であった和の精神は、中央集権化が進み、中間集団が一定程度解体される明治以降も引き継がれた。特に、大正デモクラシー以後、個人の権利意識が芽生え、さらにロシア革命の影響を受けた大衆の諸要求が提示されればされるほど、その反作用として和の精神の強調が図られ、全体主義の強化が図られていく。政府による当時の思想教育の中核をなした「国体の本義」（昭和十二年）に、この「和の精神」が強調されている。

（中略）

あらゆる価値観がひっくり返った戦後も「和の精神」は受け継がれた。昭和二十九年に発行された「調停読本」の序文にこう記されている。

云うまでもなく調停の基本理念は和であって、聖徳太子が今から千三百年前制定された十七条憲法の第一条に「以レ和為レ貴」と示されているとおり、和を尊ぶのがわが国民性であるから、わが国において調停制度が発達するのも当然であろう。

私の小中学生時代、朝礼のたびに行進させられて各教室へ入った思い出がある。いまの小中学校ではどうなのか知らないが、当時は足の上げ下げや手の振りなどをそろえないと体育の教諭から大

目玉を□。集団は個人に和を求め、個人は集団に和していく。和の精神が尊ばれるところでは、個人の突出は許されない。学級で全員がオール3、運動会の徒競走では皆が一着、学芸会では複数のシンデレラ役が登場し、遠足で持参できるお菓子や小遣いに制限が設けられるのも④和の精神の所以なのだろうか。

和の精神と融通性はつながっている。日本では和を保つという至上命題を成就するために融通性が発揮されてきたからだ。

日本人の融通性について、法律を座標軸にして考えてみよう。

本来、法律はそのことばの意味を明確にし、恣意的な運用を避ける方向で努力がなされてきた。しかし日本は法律のことばの意味を本来不確定的・非固定的なものとして意識し承認している社会だと川島武宜は指摘する。もちろん西洋の社会でも法律のモンゴンの意味を、時代や社会の変化に応じて妥協させているし、そもそも現実とのギャップを埋める努力が払われなければ、法律の機能を損なってしまうことさえあり得る。しかし、現実への妥協ないし調整は、日本社会におけるように「なしくずし」ではなく、それソウオウの努力や抵抗と公の手続きを経てなされてきた。

(中略)

⑤日本の民事訴訟件数は諸外国に比べて著しく少ない。最高裁判所によれば、一九九七年の一年間で日本の地方裁判所、簡易裁判所に持ち込まれた民事第一審訴訟の新受件数は合計で四二万二七〇八件、アメリカではおよそ三七倍の一五六七万五七三件(連邦地方裁判所と州の裁判所の合計。日本の簡易裁判所に相当する裁判所の件数は含まず)、イギリスでは二二三万八一四五件、日本の人口の約六五%のドイツでは二一〇万九二五一件、日本の約半数の人口のフランスでも一一二万四三四四件となっていて桁数が違うのだ。これはいまから二〇年以上前の数字ではあるが、二〇一七年の日本の新受件数が四八万三〇六二件と微増であることを考えると、この差は現在でもあてはまると見ていい。

訴訟に訴えるということは公に喧嘩を吹っ掛けるということであり、理性的な社会の空間では当然の権利である一方で、感情的な世間という空間では秩序を破壊する行為ともみなされかねない。

具体的な例を示そう。

一九七七年五月八日、三重県鈴鹿市で三歳の男児が農業用の溜池で水死するという事件が起きた。この水死をめぐって亡くなった三歳児の両親が、子どもを預かってくれた隣人の母親らを相手取って損害賠償の訴えを起こした。世に知られた隣人訴訟だ。

(中略)

一審の津地方裁判所は一九八三年二月二十五日の判決で、七割の過失相殺を認めたとうえで、被告側に五二六万円の賠償を命じた。被告は控訴し、原告も国や自治体の管理責任が認められなかったことから控訴を検討した。ところが、判決直後から原告夫婦への匿名の嫌がらせが始まり、

「恩を仇^{あだ}で返すとは何事か」「ひとでなし」「子供をエサに金もうけするのか」「死ぬ」などの中傷や脅迫^{きよまはく}の電話が五〇〇〜六〇〇本かかり、はがきや手紙は五〇通を超えた。原告の夫は電気工事の請負^{うけお}の仕事を打ち切られ、転職を余儀なくされた。小学生の長女も近所や学校で嫌がらせを受けたという。このため原告側は控訴を断念し、さらに訴えそのものを取り下げざるを得ない事態に追い込まれた。そのことが報道されると今度は被告側にも非難の電話などがくるようになって、結局、被告側も訴訟を取り下げた。

法務省は「国民のひとりひとりが、法治国家体制のもとでの裁判を受ける権利の重要性を再認識し、再びこのような遺憾^{いかにん}な事態を招くことのないよう慎重^{しんちょう}に行動されることを強く訴えるものである」と異例のコメントを出した。

⑥ 四〇年以上も前の出来事だと一笑に付すわけにはいかない。ひとりよがりの「正義感」は時代を超えて折々に顔を出す。二〇二〇年のコロナ禍で盛んに聞かれた「自粛警察」なる言葉も根は同じだ。あそこの店は自粛していないと店に張り紙して回ったり、ネットを通じて攻撃^{こうげき}したり、警察や県庁に通報したりする。

(中略)

融通性が発揮されるのは世間の秩序を乱さない限りにおいてであり、暗黙^{あんもく}の掟が破られたとみなされたときには激しい不寛容^{ふかんよう}が「逸脱者^{いっだつしや}」に向くのである。

(齋藤雅俊『自己責任という暴力―コロナ禍にみる日本という国の怖さ』より)

問1 ― 線 a ~ d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ― 線①「日本人のマスク重視はどこからきたのだろうか」とありますが、この問いに対する筆者の答えはどのようなものだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 政府やメディアによる過剰^{かじょう}な煽りと、周囲の空気を敏感^{びんかん}に察知し自らもそれにならおうとする日本人の心性。
- 2 非科学的な知識に対する盲信^{もうしん}と、自分さえ感染しなければ周囲はどうなってもよいとする日本人の心性。
- 3 感染対策の常識を疑う批判的思考力と、周囲の人間が嫌がることでも自ら進んでひきうけようとする日本人の心性。
- 4 ウイルスに感染した人に対する偏見と、何事においても一人で意思を決定することが苦手な日本人の心性。

問3 ——線②「一枚岩はまさにそれだった」とありますが、どういことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 何事も周囲に合わせないと行動を起こせない日本人が強固な意思を示したきつかけこそ、危険な国に自ら出かけて人質になった人へのバッシングや自国での五輪開催を願う気持ちだったということ。

2 定められた行動の方向性からめとられ、人質のバッシングや五輪誘致が過熱していったことこそ、「世間の掟」が日本人の行動を縛ってしまふ恐ろしさをよく示しているのだということ。

3 人質となつてしまった人への追及や五輪の誘致の際に国民が強固な団結を見せたことこそ、ひとたび指針が定まると皆がそれに追従しようとする日本人の行動原理によるものだということ。

4 自ら危険地帯に出かけた人質への追及や東京五輪を誘致しようと日本国民が強いまともりを見せたことこそ、近代合理主義によつて培われた日本人の伝統によるものだということ。

問4 ——線③「日本人の意識にはこの惣が沈んでいる」とありますが、どういことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 時には武装蜂起も辞さない「惣」が持つ攻撃性は、刀狩りによつて解体させられた後も、強烈なバッシングなどの日本人の行動に見え隠れしているということ。

2 中世における「惣」に代表されるような、集団の団結や秩序を重んじる精神性は、現代に至るまで受け継がれているということ。

3 中央集権化が進む以前の自治的な「惣」のあり方には、明治期に本格的に導入される合理主義の精神を感じ取ることができるといこと。

4 大正デモクラシー以後の日本で「和の精神」が強調された背景には、自治的な小集団が動乱を引き起こしたことに対する反省が見られるということ。

問5 空らん□にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 もらった 2 突かれた 3 食った 4 取られた

問6 ——線④「和の精神の所以」とありますが、次の1～4の具体例のうち、「和の精神」の表れとしてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

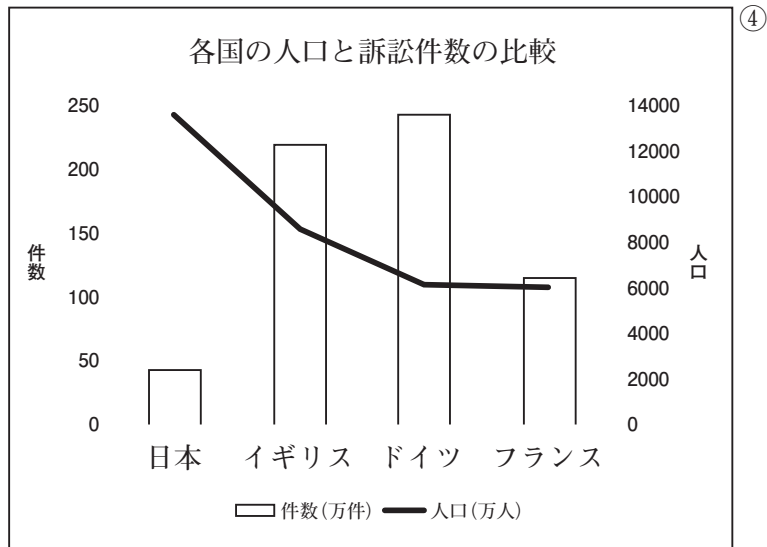
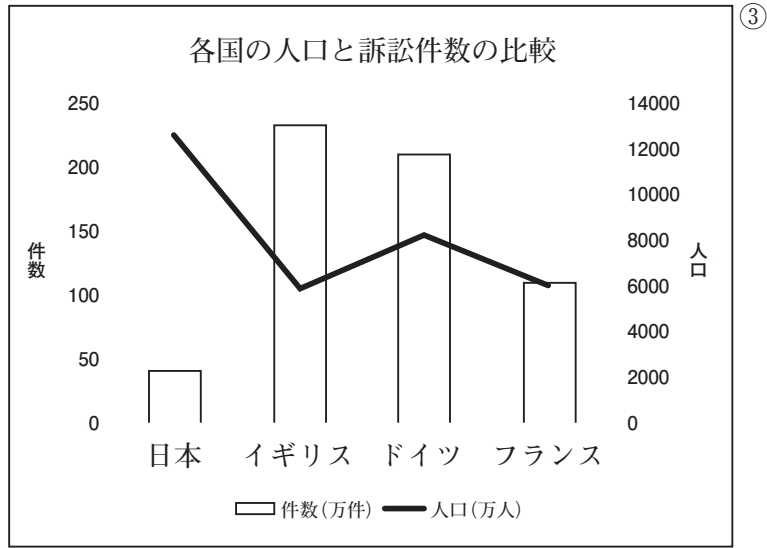
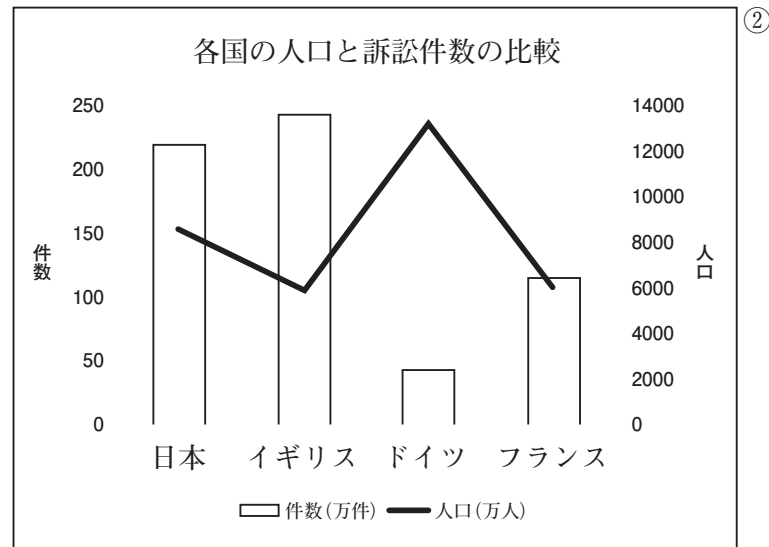
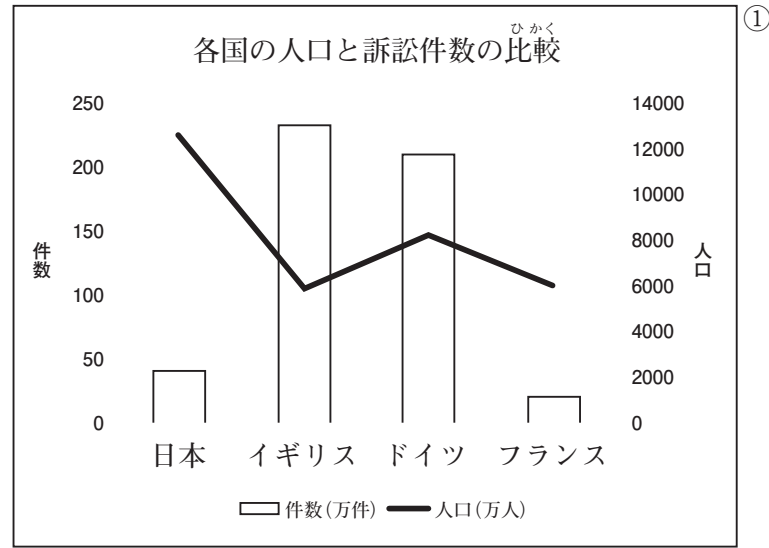
1 あまり面白いと思えなかった小説が友達の間では人気だったので、自分も肯定的な評価をした。

2 自分がすべき仕事は既に終わらせているが、まだ残業をしている同僚の目を気にして職場に残った。

3 討議で出た意見に違和感を覚えたものの、班でまとめることを重視して自分の意見を飲み込んだ。

4 自分が憧れている俳優に少しでも近づけるように、自分も同じファッションに身を包んだ。

問7 — 線⑤ 「日本の民事訴訟件数は諸外国に比べて著しく少ない」とありますが、本文からうかがえる各国の人口と民事訴訟件数（一九九七年当時）を示したグラフとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。



問8 ———線⑥「四〇年以上も前の出来事だと一笑に付すわけにはいかない」とありますが、ど

うしてそのように言えるのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 溜池での水死事故をめぐる世間の人々の反応は、集団の秩序を乱したものに対しては攻撃的になる日本人の心性の表れであり、コロナ禍においても起こり得るものだと言えるから。

2 法務局が強く訴えた裁判を受ける権利の重要性は四〇年以上経った今も変わらず、ただの民衆が人を裁こうとする「自粛警察」になってしまふコロナ禍においてこそ保障されるべきだと言えるから。

3 中傷や脅迫にさらされた原告側が控訴を取り下げたのは、日本人の融通性が発揮された好例であり、「自粛警察」が横行するコロナ禍でこそ過去の出来事が見直されるべきだと
言えるから。

4 隣人を対象として裁判を起すということは、融通性が発揮される日本ではなかなかないことだったが、コロナ禍によって溝ができてしまった現代の人々の間では容易に起こりうることだと言えるから。

問9 ~~~~~線について、文字と文字の間にある小さな「レ」は「レ点」と言い、昔の日本人が中

国語で書かれた文章を日本人も読めるように発明した記号です。これに従うと、「以レ和為レ貴」は「和を以て貴しと為す」と読むことができます。では「吾能料生、不能料死」を「吾能く生を料るも、死を料る能はず」「不」は「ず」を表しています」と読むためには、レ点をどのようにつければよいですか。解答らんに書きなさい。

2 次の文章は三浦哲郎の小説「なみだつぼ」の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① あの囲炉裏いろりがなくなったら、おふくろのなみだつぼは、どうなるのだろう。

北の郷里の家で独り暮らしをしている姉から、近いうちにもはや無用になった囲炉裏いろりを塞ふさいでしまおうかと思っているが、異存はないか、といってきたとき、真っ先に私の脳裡のうりをかすめたのはそのことであつた。

郷里の家族が数十年も前から借りて住んでいる漆喰壁しっくいかべのくすんだ家は、もともと養蚕農家として建てられたもので、背戸がけしたから崖下がけしたを流れる川音がきこえる台所の板の間に、大きな囲炉裏いろりが切つてある。先住者たちは、もっぱらこの囲炉裏いろりに薪を焚たいて煮炊にたきををし、煖だんをとつたものとみえ、頭上こうさくに交錯こうさくしている大小の梁はりも、天井板も、真っ黒すすに煤すすけていて、どのようにして出来るものか知らないが、かなりの長さの煤の紐ひもが天井からも梁からも何本となく垂れ下がっている。

郷里の家族も、その囲炉裏いろりを大いに利用したが、薪ではなくてもっぱら木炭を使つていた。当時、郷里のあたりでは炭焼きがさかんで、木炭ならたやすく手に入つたからである。けれども、木炭の火力では大した煮炊にたきはできない。せいぜい自在鉤じざいかぎに鉄鍋てつなべの鉉つるを掛かけてなかのものを温めるとか、金串かなぐしに刺さした魚を炭火のまわりに立て並べて焼くとかするぐらいである。

その家へ移つてくる前から、軽い脳梗塞のうこうそくを患わづらつていた父親は、自分の生家にもあつたという囲炉裏いろりを懐なつかしかつて、一日の大半を炉端ろばたで過ごすことが多かつた。なにをするともなく炉端いろりについて、医者いしやに禁いじられていた煙草たばこを日に一本だけ目を細くして喫のんでいた。

おふくろに無心Bして、やつと許された一本である。おふくろは、いちどに一本喫のんでしまうよりも、楽しみは多い方がよからうと、一本の*ゴールデンバットを鉉はさみで五等分して父親に渡わたしていた。父親は、一つずつ鈍豆煙管なまめぎせるに差し込み、うっかり落とさぬように細心の注意ちういを払いながら炉の炭火を移して、煙管えんくわんのなかで脂あぶらがじゅくじゅくと音を立てるまで喫のんでいた。

父親の姿すがたが炉端いろりから消えるのは、外へ歩行練習きんじゆに出かけるときと、川沿いに橋のたもとの銭湯へいくときだけであつた。私も、学生時代、休暇きゆうかで帰省ききやうすると、毎日父親のお供おともをして銭湯へいくのがならわしであつた。父親は、道を歩くとき、両手を腰こしのうしろに組くむのが癖くせであつたが、病氣びやうきのために片方の手がひとりでに動き、石鹼箱せけんのなかの石鹼せけんが絶えずことと音を立てていた。

橋のたもとの銭湯では、前の川から水を引いているという噂うわさがあつた。③ 実際、口開けの客になつたりすると、湯船あゆに鮎ちぎよが浮ういているのを見ることがあつた。父親は、元気なころ、打ち釣うちづりりというのに熱中ねつちゆうしていた。細身の竿さおに、ちいさな擬餌鉤ぎじりをつけ、川面かわもを打つようにして雑魚ざぎよを引つ掛ける釣りである。川沿いの道を帰つてくると、水際みづぎの手頃てごろな石に腰を下ろし、両足を川かわに浸ひたして打ち釣うちづりりをする人たちが、あちこちにいた。父親は、石鹼箱せけんをかたかたと鳴らして歩きながら、目に入る釣人つりたちを、あれは餌えさの荏胡麻えんごまの撒まき方がまずい、あれは竿さおの操あやつり方がなつていない、などと片っ端から批判した。その口吻こうふんには、老いばれてもはや打ち釣うちづりりさえもできない

くなくなった悔しさが籠っていた。

囲炉裏の管理は、おふくろに任されていた。おふくろは、どういふものか、私の子供時分から炉の掃除を好んでいたとみえて、手ぬぐいで姉さんかぶりをし、炉端に背中をまるくして、金網で拵えた手軽な篩で丁寧に灰を篩っていた様子が、古い記憶に鮮明である。旧養蚕農家の囲炉裏は、私自身の生家の炉を二つ並べたほども大きかった。けれども、おふくろは却って掃除の遣り甲斐があると喜んでいて、晴れて穏やかな日の昼下がりに、しばしば、まず邪魔になる父親を散歩に追い立てた。確かに、脳の血管を病む人は、一日にいちどは戸外へ出て新鮮な空気を呼吸しながら歩き回ってきた方がいいのである。

「裏の橋までいつてきなしゃんせ。」

と、おふくろは素足にゴムの短靴を履いている父親の背にいった。裏の橋というのは、ちよど町の裏手に架かっている、橋脚の高い古びた木の橋である。

④「橋の上から、釣人たちの悪口でもいいながら、しばらく見物してきてくんしゃんせ。」

父親は、両手を腰に組んでのろろと出かけていく。おふくろは、六十を過ぎても不思議に白髪の出ない頭に相変わらず手ぬぐいで姉さんかぶりをし、襷を掛け、裾が足の甲まで届く前掛けをして、いそいそと掃除に取り掛かる。まず、自在鉤の埃を払い、金網の篩で灰を篩い、それから水で絞った雑巾で炉縁を拭く。篩に残った煙草の吸殻や、ちびた鉛筆や、なにかの紐の燃え残りなどの異物は、火から最も遠い隅に置いてある蓋つきのつぼに捨てる。

このつぼは、私たちがその旧養蚕農家へ越してきたときから、そこにあった。先住者が忘れていったというよりも、捨てていったと思う方がふさわしいような、お粗末なつぼである。色は黒、厚手の焼きものだが、何焼きかはわからない。よほど粗雑に扱われてきたらしく、外側は疵だらけで、素材の壁土のようなものが露出している。大きさは、古陶器の種つぼより一回り大きいくらいだが、無論、名のある窯で焼かれたものであるはずがない。

おふくろは、掃除を済ませたあと、さっぱりとした炉端にぼつんと独りでいることがあった。そんなときは、横坐りになり、炉縁に左手を突いて上体を支え、右手の親指と人差指とで火箸の一本の頭をつまみ上げて、それをふらふらさせながら、自分がよく均したばかりの灰の上に、なにかを書いては消し、書いては消しするのである。

それは、子供のころから、おそらく何百回となく目にしてきた光景であった。はじめは習字の稽古でもしているのかと思った。けれども、それにしても火箸の先端の動きに秩序がなさすぎる。それとなく見ていると、文字のほかに、図形や模様のようなものも混じっている。それで、おそらく、物思いに耽りながら、心に浮かんでくる雑多なことを、^Cとりとめもなく文字や形に描き出しているのではないかと思うようになった。

おふくろが火箸の一本を手にとると、炉端はなにやら近寄り難い静寂に包まれる。おふくろはなにかに没入しているようで、声を掛けるのも憚られる。遊び疲れて外から帰ってきた子供の私

も、休暇で帰省している学生の私も、座敷に寝そべってうたた寝を装いながら薄目で炉端のおふくろをただ眺めているほかはなかった。

うつむいたおふくろの尖った鼻の先に、不意に水玉が宿って、きらと光るのを初めて見たのは、いつだったか、もう思い出せない。ああ、おふくろが独りでひっそりと泣いている、そう思って物悲しくなった記憶だけが微かに残っている。

その後、炉端のおふくろの鼻の先に水玉が宿るのを、何度見たことだろう。最初に宿った水玉は、光り、顫え、やがて堪りかねて、落下する。落ちたあとには、すでに次の水玉が光っている。そうになると、水玉は次から次へと鼻梁を滑り落ちてきて、しばらくは途絶えることがない。

おふくろが、いま、なにを思い出し、なにを悲しみ、なにを哀れみ、なにを悔んでいるかを、いい当てることはできなかったが、その人生が悲しみに満ちた日々の積み重ねだったことを私は知っていた。おふくろには、押せば水玉の噴き出る記憶しかないはずであった。どんな同情も、慰めも、おふくろの心を傷つけるだけだろう。私は、胸を痛めながら、炉端の人の鼻先からしたたり落ちる水玉のはかない輝きを、ただ黙って見守っているだけであった。

しばらくすると、我に返ったように火箸を灰に突き差し、襦袢の袖口で目頭を抑え、自分が荒らした灰を灰均しでぎと均して立ち上がる。ふと、思いついたように、仏壇の鉦をちいさく叩いてくることもある。

私は、二十八の年に、都落ちをして、一年、郷里の家で厄介になったが、その折に、おふくろが去ったあとの囲炉裏の灰のなかから、火箸で涙のかたまりを取り出す癖がついた。涙のしたたりを吸い込んだ灰は、大概、細長い円錐を逆様にした形に固まって、茶色に変色していた。巡礼の鈴のような形をしたものもあった。数珠の一部のように、おなじ大きさの玉がいくつかが繋がっているのもあった。いずれも脆いかたまりだから、すこし離れたところから注意深く掘り進めなければならぬ。

掘り出したものは、火箸ですばやく掌に取る。途中で崩れてしまうものもすくなくないが、崩れても涙のかたまりにはちがいないから、移植鏝で残らず掬い取る。やがて、変色した灰のちいさなかたまりや、もつとちいさな粒々が、私の掌の窪みを埋める。

けれども、私は、^⑤自分のおふくろの涙を吸った灰だからといって、それを小綺麗な塚かたまりに入れて保存しておくほど物好きではない。私は、掌の灰を囲炉裏の片隅に置いてある何焼きとも知れない黒いつぼのなかにこぼして、蓋をする。おふくろは、十数年前に他界して、もう囲炉裏の灰にもものを書く家族はいなくなったが、いまでもなみだつぼだけが元のままだに残っている。

いまは、いくら田舎でも、茅葺屋根を持つ農家でない限り、薪を焚いて煮炊きをしたり煖をとったりするための囲炉裏など、無用の長物とっていいだろう。姉もガスで煮炊きをし、石油ストーブで部屋を暖めている。もはやなんの役にも立たない囲炉裏を早く塞いでしまいたいのは無理もない。

どうぞ、あなたの都合のいいように、と私は答えて、ついでに例の黒いつぼのことを尋ねてみ

た。姉には、そのつぼが、おそろくただの囲炉裏のつぼにすぎないのである。

「まだいつものところにあるわえ。」と姉はいった。「塞ぐとき、自在鉤やなんかと一緒いっしょに捨てようと思ってたけど、要いるなら残しておく。」

べつに要いるわけではないが、邪魔まじにならないようなら残しておいてくれるようにと、私は頼たのんだ。

春になって、川を覆おほっている氷が融とけはじめたら、私はいちど様子を見に帰郷ききょうしてくるつもりだが、その折ひに、あのなみだつぼを抱だいて泥濘ぬかるんだ崖道がきをくだり、^⑥あまり釣人が寄りつかないような淵ふちへそつと沈しずめてくるのも悪わるくないと思おもっている。

(三浦哲郎「なみだつぼ」全文)

※自在鉤……炉・かまどなどの上に、上からつるし、鉄瓶てつびん・鍋かま・釜かまなどを自在に上下させる装置

の鉤。(『広辞苑』第七版より)

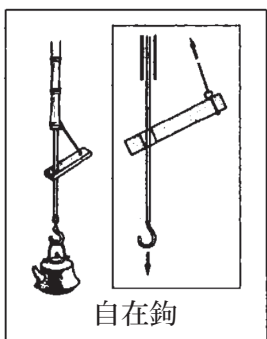
※ゴールデンバット……低価格の国産タバコの名。

※鈍豆煙管……ナタママのさやの形に似た喫煙具きつえんぐ。

※襦袢……和服の下着。

※都落ち……都会を離れて地方に移り住むこと。

※移植鏝……草花や野菜を植え替かえるときに使う小型のシャベル。



問1 ——線A～Cのことばについて、文中での意味として最もふさわしいものを次から一つず

つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A 「くすんだ」

1 よごれた

2 壊こわれた

3 黒ずんだ

4 目立った

B 「無心して」

1 命じて

2 あきれさせて

3 同情させて

4 ねだって

C 「とりとめもなく」

1 何かを表そうというわけではなく

2 だれかに伝えようというのではなく

3 だれかに教えられたわけではなく

4 何かでたとえようというわけではなく

問2 ——線①「あの囲炉裏がなくなったら、おふくろのなみだつぼは、どうなるのだろう」という部分は表現としてどのような効果があると考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「どうなるのだろう」と問いかけることによって読者の興味を強くひき、これから始まるなみだつぼの不思議な物語の世界に素早く引き込む効果。

2 囲炉裏という物の名を提示することで実家の情景を思い起こさせ、母親の思い出というだれもがわかる話題をすぐに共有できるようにする効果。

3 「どうなるのだろう」と問いながら否定的な真意をこめて作品に奥行きを与え、母親のなみだつぼに関する悲劇を際立たせようとする効果

4 「あの囲炉裏が」と出しぬげに文章を始めて意外な感じを与え、なみだつぼという聞き慣れない物の名によって読者の想像力をかき立てる効果。

問3 ——線②「軽い脳梗塞を患っていた父親」とありますが、この文章の中で父親はどのように描かれていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 病になってしまったにもかかわらず、煙草をやめないなどわがままな生活を送っており、家族が苦々しく思う人物として描かれている。

2 不幸にして病を得たために家族に負担をかけてしまい、思うに任せない日々を送っているが、憎めない人物として淡々と描かれている。

3 たまたま病になってしまったとはいえ、いまだに家族の中心であり、主人公に準ずる重要な人物として描かれている。

4 難しい病にかかってしまった割には、釣人をどんどん批判するなど元気であり、家族に希望をもたらす人物として描かれている。

問4 ——線③「実際、口開けの客になつたりすると、湯船に鮎の稚魚が浮いているのを見るこどがあつた」とありますが、この部分は何のようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 小説の中でアクセントとなる印象的なエピソードで、ややもすると深刻になりがちな物語を和らげるためのちよつとしたユーモアを表している。

2 非常にインパクトのある場面だがあり得ないシチュエーションであり、私の記憶がもはや混乱してきてしまったというネガティブな悲しみを表している。

3 舞台である実家が大自然の中にあるということをダイレクトに示す証拠であり、フィクションとしての小説が持っているリアリティを表している。

4 父親の人物像をことばで表すには微妙なニュアンスが必要なので、私の父親に対する心情をユニークな比喩を用いたイメージとして表している。

- 問5 ——線④「橋の上から、釣人たちの悪口でもいいながら、しばらく見物してきてくんしゃんせ」と言つた母親の心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 釣りが好きであった父親をあげますために言いたくもない冗談じやうだんを口にして、自分が父親のことで悩なやんでいることをさとられないようにしようとする気持ち。
 - 2 父親が釣人とけんかしては困るのでそうならないよう戒めいましつつ外出を促うながし、だれにも言えない家族の秘密を囲炉裏の灰にだけ書き付けておこうという気持ち。
 - 3 体が不自由になつた父親を傷つけないように気を配つて外に出し、自分は家に残つて家事をしながら一人になりたいという気持ち。
 - 4 つらい気持ちを紛まぎらわせるように威勢いせいのよい言葉を父親に投げかけ、ひとり家事に打ち込むことによつて悲しみを乗り越えようという気持ち。

問6 ——線⑤「自分のおふくろの涙」とありますが、母親の思いがこめられた涙をもつとも象徴ちやうてき的かつ詩的に表現した部分を、本文から二十五字ちようどでぬき出しなさい。

問7 ——線⑥「あまり釣人が寄りつかないような淵へそつと沈めてくるのも悪くないと思つている」のはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 家族の悲しみはみんなで分かち合うべきものだと思つてはいるが、すでに両親もいなくなつてしまつたのでそうするわけにもいかず、悲しみをなみだつぽごと水に流してなかつたものにしてしまうのがふさわしいと思つたから。
- 2 母親がひとりで背負つた家族の悲しみを引き継つぐのは自分しかないと思う一方、涙に暮れる母親をそつと見守つたように、なみだつぽは自分だけがわかる人目につかないところに隠かくしてしまふのがふさわしいと思つたから。
- 3 家族の悲しみを母親一人に負わせてしまったことを反省して忘れないようにしようとしたが、なみだつぽは汚よごれていて家の中に置いておけないため、屋外の自分だけがわかるところに隠しておこうと思つたから。
- 4 順番からいえば母親に代わつて姉が家族の悲しみを受けつぐべきだが、その姉は現実の生活で手いっぱいであるためなみだつぽを押しつけることはせず、家族ゆかりの川にそつとしまつておこうと思つたから。

問8 本文の表現の特徴を説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 私の視点で見た家族が比喩を多用して表現され、心情が読者に訴えかけるように描かれている。
- 2 現在から過去にさかのぼるかたちで家族を語り、いきいきとした会話を中心として描かれている。
- 3 家族それぞれの視点で物語が語られ、家族の出来事が時間の順にダイナミックに描かれている。
- 4 現時点の私が記憶をたどりながら家族を語り、人々の内面を簡潔な表現で静かに描いている。

(問題は次のページに続きます)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

心の貪欲
谷川俊太郎

いま見えているもの
聞こえているもの
いま匂うもの
触れているものだけで
どうして満足できないのか
心の貪欲に
嫌気がさすことがある
さらに遠くさらに深く
① その先に未知の何かがある
そう思っ生きてきた

② 科学はヒトの肉体を離れて
光速で遠さを測り
数式で宇宙の単位を刻んで
不死に近づこうとするが
③ 魂は人語の限界で揺らいでいる

小さな体は宇宙服の中でも
眠り起きそして働き
時々刻々の日常を過ごす
永遠は詩に生きるしかない
無限は数式で夢見るしかない

(朝日新聞二〇二三年五月十一日夕刊掲載)

問1 この詩に使われている表現技法としてふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法 2 反復法 3 対句法 4 直喩法

問2 ——線①「その先」とありますが、「その」が指している部分を詩の中からさがし、最初と最後の七字をぬき出しなさい。

問3 ——線②「科学はヒトの肉体を離れて」とありますが、「科学」と「ヒトの肉体」との関係を示したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 感覚と感情
- 2 可能性と限界
- 3 創造と現実性
- 4 時間と空間

問4 ——線③「魂は人語の限界で揺らいでいる」とありますが、どのようなことを言おうとしているのですか。それを説明したのとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 数式や単位に比べて、人間の発する言葉は生命の限界をこえることができないことに、複雑な思いを抱いているということ。
- 2 数式がものごとを明解に説明できることに比べ、人間の言葉はあいまいであるということに、嫌気がさしているということ。
- 3 宇宙の真理に近づこうとする時、言葉で表現できることとできないことがあることに、不満を感じざるをえないということ。
- 4 永遠の命を追い求めようとすると、言葉を話すことがさまたげになるということになりきれない気持ちでいるということ。

問5 この詩で作者が表現したかったこととしてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人間は自分の限界をこえたいと思う生き物であり、そのために文明や文化を発展させてきた。
- 2 数式や単位は、人間の日常生活をはるかにこえた世界を表現することができるものである。
- 3 自分の分をわきまえない人間の貪欲さに疑問をもつ作者は、詩に救いを求めようとしている。
- 4 詩と科学とは異なる側面をもつが、人間の日常生活との関係から見ると共通点をもっている。

4 次の①～⑤について後の問いに答えなさい。文中の空らん□には部首名が、「ゝ」には、
答えとなる漢字が入ります。

- ① 「ころも」の部の7画の漢字。「隠かくれた。見えない」というのがもとの意味で、「ゝづけ」
では「根こん拠」という意味にあたる。
- ② 「き」の部の総画数8画の漢字。木の上にくくつもの実がなったことを表す。「終わり。
できばえ」などの意味でも用いる。
- ③ 「すすむ」「行く」を表す部首の部2画の漢字。物の中央に対して「はし」を意味したり、
「へり」「ふち」を意味する。
- ④ □の部の総画数9画の漢字。「むかしのこと。ふるい」などの意味で用いる。漢文
の「人」は、「死者」ではなくて「旧友」の意味。
- ⑤ □の部の総画数13画の漢字。人間がしてはならないおこないを意味する。道徳や法
律を犯すと「ゝ」に問われる「こと」になる。

問1 ①～③の説明にふさわしい漢字を、それぞれ答えなさい。

問2 ④・⑤の空らん□に入るべき部首名を次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|-----|
| 1 | れつか | 2 | ぼくづくり | 3 | まだれ |
| 4 | えんによう | 5 | あみがしら | 6 | ひ |

